

語りえない身体の所在
——公立劇場における舞台制作実践を通して

丸田 鞠衣絵

キーワード

制度、身体、リミナリティ、想起的記憶、舞台芸術

要旨

本研究は、制度により構築・維持される現実のなかで、言葉に至らない身体的応答が、いかに絡み合い、綻び、乖離を生じているのかを明らかにすることを目的とする。研究の背景には、東日本大震災の際、わずかな緊張の身体感覚が、強く大きな語りに絡みとられ、現実が虚構化していくように感じられた筆者の経験がある。

本稿では、この現実が虚構化していくかのような身体感覚を手がかりに、現実と虚構の双方に依拠する表現行為である舞台芸術の現場に着目し考察する。とりわけ、行政からの要請を通して制度的論理が顕在化する公立劇場を主な調査対象とする。

人類学における舞台芸術研究は、舞台を特異な空間と捉え、既存の社会的役割や規範が一時的に停止・逆転する場として理論を深めてきた。なかでも、ヴィクター・ターナーによるリミナリティの概念は、こうした理論を支える重要な参照点である。これらの理論的蓄積を踏まえ、本稿では、舞台芸術の制度的論理を運用・維持する主体である舞台制作者の実践に焦点を当て、現実と虚構の関係を制度の側から捉え直すことを試みる。

本調査では、筆者の公立劇場における舞台制作実践をもとに、制度の側に立つ身体として生きる経験を記述する。そこから、社会的現実のなかで身体感覚がどのように絡み合い、綻び、乖離を生じていくのかを描写する。

調査を踏まえ、制度の側に立つ身体としての経験と、制度に従属する身体としての経験とを往還することで、舞台制作における制度的管理と、人の生と死をめぐる制度的管理とが、異なる位相において同一の論理により編成されていることを検討する。

また、ガッサン・ハージおよびデヴィッド・グレーバーによる批判的人類学の議論を参照し、舞台芸術が想起的記憶の回路を開く作用に着目する。そのうえで、舞台鑑賞の経験

が記憶の回路を媒介として、制度化された現実に一時的な再定位をもたらし、身体的現実を捉え直す契機となりうる可能性について論じる。

本研究は以上の考察を通して、制度的論理に絡みとられながら綻びていく、語りえない身体の所在を見つめ、生のあり方の一側面を照らし出すことを試みるものである。